

地域を建設する人間育成のあり方を探る その2

北加積小学校元教師へのインタビュー調査 2009/8/5

北加積小学校での教育研究実践についての2回目のインタビュー調査。地域建設のカリキュラムづくりの時代（1951～32）に的を絞り、当時若手教員であった石倉アキさん、奥平正さんのお二人に伺った。80歳を超えたお二人だったが、石倉さんは驚くほどの記憶力で、作ってこられたメモを見ながら、本当に楽しげに、あまり自信がないといていた奥平さんの記憶も次第に引き出され、学校の研究態勢や、指導者矢口新と教員たちの交流の様子などについて、実感のこもったお話を伺うことができた。



しゃにむに研究した日々

月曜の定例研修会、水金の準定例研修、火曜は自主研修、その他に毎月外部講師を招いて研修会。研修会はいつも夜分まで続き、軽い夕食をとってから13人の教員が全員でそれぞれが作った単元、指導案について話し合った。帰宅10時過ぎは当たり前。石倉さんはご主人が子どもさんを連れてきて学校で授乳したという。宿直室で酒を飲みながら議論、それでも家に帰ってから必ずガリ版を切って指導案を仕上げたと奥平さん。大変な日々だった。「でも今思うと、あのころが一番充実していた」「別の学校に行ったら、皆が苦労していた指導案が楽に書けた。自分に力がついているということがわかった。」（石倉）「楽しかったね」と奥平さんに声をかける石倉さん。

人材確保と研究の環境づくりー荒館校長

北加積の教師たちの研究が成り立った背景には、荒館実校長の存在が大きかった。研究のリーダーになる人材を、他校や大学へも探しに歩いた。カリキュラム作りの中心だった松本教諭は中学の社会科教師、中核的な働きをした青柳、奥平教諭は大学時代に口説かれた。転勤を希望していた石倉教諭は、「地元の子どもたちを地元のあんたが教育せんでどうする」と説得されて残った。

荒館校長は内容には余り口を出さずに、皆が研究しやすい環境作りに力を注いだ。「遅くまで学校に明かりがついている」と村の有力者などから苦情がくると出かけていき、教師たちが真剣に研究に取り組んでいること、村の将来のためであることを語り、理解者を増やしていった。教師たちは心から校長を信頼していた。

自分でつかませる―矢口新の指導

矢口新は年5，6回泊り込みで指導に来た。言葉で細かく指導されたことはなかった。怒られたこともなかった。「そういう考え方もあるね」と言われたら、これはまだだめだと思って出直した。(石倉，奥平)

具体の中、現実の中から考える姿勢。「『答えを教えてください』と頼んだら、『僕も一緒に考えているんだよ』と言われた。」(石倉) 「はじめは「社会の実態をとらえさせなさい」といわれても、教科書に書いてあることを説明して教えることしかしてこなかったから、どうしてよいか何もわからなかった。いろいろやっているうちに、自分が調べてわかったプロセスを、子どもたちに経験させればいいんだということに気がついた。」(奥平) 夜中までつき合って指導してくれる先生は他にはいない。(石倉，奥平)

(調査班：金馬，越川，米島，小澤，榊，矢口み)

JADEC ニュース 79 号 (2009/12) より